

地域経済ウォッチング

いわき民報 2012年5月17日(木曜日)

本当の「復興」とはなにか——地域・若者そして伝統

——若者の精神の復興と実践が長期的な問題解決に必要——

現場を思考から排除した理想と正義は地域に逆効果をもたらす

□□□□□□□□□□□□□□□□東日本国際大学東洋思想研究所准教授

先崎 彰容

本年3月10日、つまり大震災から1年を迎えようとしたこの日、本学はシンポジウム「震災から一年——フクシマの復興と日本の将来」を開催した。言うまでもなく、大震災は福島県浜通りに「三重苦」を強いることになった。その三重苦にあえぐ地域の拠点大学として、教育の本丸としてできることはなにか——それがシンポジウム開催の純粋な動機だった。

震災以前にも、福島県とそして浜通りの多くの地域が「若者の流出」にあえいでいたことを私たちは知っている。福島は比較的、東京と仙台に近くその都会のもつ魅力に若者たちは惹きつけられる。今回の震災は若者だけではない、多くの「福島県人」の流出を招いたのだ。

「復旧・復興」のスローガン、あるいは大量の公的資金の投入、そういった話は東京から私たちの耳元にも届いてきた。だが、と私は思った。もし福島に残る若者がいなければ、次世代を担う存在が不在だとしたら、金や掛け声はあったとしても、いったい誰が動くのか？誰が道路の整備や住民の声を聴き、具体化し、そして実現して行くのだろうか。問題の解決が長期的であることは、もう誰もが知っている。だとすれば若者の精神の復興と実践こそ、福島と浜通りにとって必要ではないか——私たちはまずもって若者へのメッセージの意

味を込めて、シンポジウムを開催したのである。

実は私自身は、いわき市の出身ではない。厳密に言えば単身赴任の身であり、週末は家族の元へと帰る生活を震災以前から続けている。この平日＝福島人と、週末＝東京人の二重生活は、私をある意味で「二重人格」にした。どういう意味か。それは私が過日、別冊『世界』八二六号(岩波書店)に書いた次の言葉に尽くされている。

仕事先はいわき市にあるのだから、私の半身は被災者の感情をもつ。だが週末東京へと帰る半身は、被災地を遠巻きに眺める人間の側にあるのだ。たとえば東京にいる時、放射線のこと騒ぎ立てている人たちをみると、言いようのない気分になる。だからわざと福島産のものを買って食べる。また震災から3カ月以上経ったある日、勤務する大学に「救援物資差し入れ」といって大量の子供向けお菓子が贈られてきたときにも、感謝よりも違和感先にたった……現場をしらないことへの困惑が、不躰な同情に思えてしまった。

東京で「いわき市」という名前をあげる。すると皆、困惑した憐れみの眼で私をみる。しかし実際はどうか。いわきは今、良かれ悪しかれ「震災バブル」にざわめいているのではないか。私がいいたいのはこういうことだ。

東京での同情も、時に私たち「地域」に生きる者に複雑な思いを強いるということだ。同情が「地域」の伝統や蓄積、そして現状をしらないまま発せられる時、風評被害に加担する。それは少し、抽象的な議論を許してもらえらるなら、現場を思考から排除した理想と正義は、「地域」に逆効果をもたらすということだ。私の「二重人格」とは、この被災地／非被災地の落差が嫌でもみえてきしまという意味なのだ。

地域とは、なにか。地域文化とは、なにか。

シンポジウムの中で、被災の現場を指揮した遠藤勝也・富岡町長の言葉に、私は思わずメモを取る手を止めた。原発被災地が抱える7つの課題を挙げた町長は、その第5番目に「賠償」を挙げた。そしてその賠償責任には「これまで培ってきた文化と歴史への賠償」が入っているといわれたのだ。私たちは、賠償や電力問題をすぐに金銭的・反権力的な文脈に結びつけてはいないか？だがそれは間違っている。「地域」にとって賠償とは、失われた故郷へのこの思いを、哀愁をどうしてくれるのか、という悲痛な叫びに他ならない。この精神的な地域文化の復興を、次世代を担う若者たちはどう聴いていたか。そう思って、私はメモを取る手を止めたのである。